

## おくすりのなる木

ちり〜ん

「ああ、カキ氷」

ちりり〜ん

「アイスクリーム、シャーベット、チョコバナにフラッ  
 ペ、コーラフロート　ああ、冷たいスイカもい  
 なあ」

り〜ん

「で、なぎさはどれにするの？」  
 へ？

起き上がったら、ほのかのにこにこ顔。縁側の上  
 に、淡いグリーンのワンピースが涼しそう　ああ、  
 そうだ。ほのかの家に宿題教えてもらいに来て、縁  
 側が涼しいからつい、ころん、って転がっちゃった

んだっけ。

ほのか、にこにこ笑いながら、ちらっと下を見て  
 る。つられてちょっと目をおろしたら　あたしと  
 ほのかの間、さっき言ってた食べものがいつぱい。

「ほ、ほのか？　まさかこれ、全部用意したの!？」  
 うっわあ〜、なんかもう、よだれが

「まさか。これはね、喫茶店用のサンプルよ」

そ、そうだよ。そりやそうだよ。　ああ、ほ  
 のかっば、吹き出すのがまんしてる、って顔だよ。  
 まったく。このくらい、やってもおかしくないって  
 のが、ほのかのコワいとこなんだけどなあ。

それにしても、このサンプルのすごいこと。フラッ  
 ペだけで6種類もあるじゃない。

「こないつぱい揃えて、お店でもひらく気？」  
 大きなお盆にサンプル片付けながら、ほのかが首  
 ふった。

「うっん。こんど化学部でツリーを作るから、その  
 参考に、ね」

21 おくすりのなる木

ツリー??

「ええ。真夏のクリスマスツリー。」

『おくすりのなる木』よ♡」

\*\*\*\*\*

「それで、みんなはどうなの?」

午後になってから、わたしはなぎさと別れて、学校の理科室までやって来た。

昨日かかってきた電話で、だいたいのはことは聞いてたけど、理科室にはユリコひとりだけ。

「ん、まだ目とのが痛いつて。ほのか以外、全員お休みい〜」

お休みい、じゃないわよ。

「ユリコもユリコよ。なんだってそんなガス出しちゃったの?」

理科室で光化学スモッグ作っちゃって、みんなゲホしてた、っていうんだもの。

「だつてさ」

ユリコ、乳鉢でなにかすりながら、ちょっと上目づかいでわたしを見てるわ。

「硫酸が甘い匂いしたら、面白そうだなあ、って」

ああ、ユリコもこういうところ、なぎさと同じなのよね。思いつくと突っ走っちゃうんだから。

「黒板に化学式まで書いているのに」

黒板には、大きく式が書いてある。左辺にシヨ糖+硫酸。右辺は

「化学変化しても、炭素と水だけだと思ったのよ、それじゃ、ひとつ足りないでしょ?」

「Sはどこ行ったのよ。S イオウは!」

「ああ、ほのかがSだあ〜」

「コッソ!」

「痛ったあ! ガラス棒は叩き用じゃないつて!」

もう、なぎさとわたしはドクゾーンで決死の闘いしてたつていうのに、なにやってたんだか。

でも

目が思わず自分のカバンに向いた。なにもついてないカバンに。

そだね、これが普通の中学生なのよ。ああ、終わったんだわ。本当に

\*\*\*\*\*

ほのかが学校に行ったあと、あたしはひとりでぶらぶらしてた。なぜか制服着て、なぜかカバン持って。でも、なんだか変。歩いてても、うまくバランスがとれない。っていうか うっん、理由はわかってるんだ。いつもカバンにぶら下がってる、ポシェットがないから。

バック牛乳一本くらいがこんなに重かったなんてね。

いつの間にか、あたしは校門をくぐってた。校舎を

ぼんやりながめながら、グラウンドに歩いてく。ラクロスのコートはならしたまんまで、足跡のひとつもありゃしない。

「ふう」

ためいきつきながら、あたしはコートわきの芝生に腰をおろした。

(運動しないと、なぎさはすぐ太るメボ)

「うるっさ! はあ」

だめだなあ。声まで聞こえてくるなんてさ。これじゃメッブルに笑われちゃう。ちがうか。こんなところ見られたら、心配かけちゃうな。

なんだかんだ言ったって、メッブルは自分でぶるさとを救ったんだもん。そりゃ、あたしたちが死ぬほど ほんとに死ぬほど頑張ったおかげだけど。

やっと平和になった世界で、楽しく暮らそうってのに、心配かけるわけにいかないよ——

遠くで、男の子の音がする。そっか、サッカー部

が練習してるんだ。藤村先輩の姿、豆粒みたい。

メッブル助けて闇にも勝ったっていうのに、あたし自身はまだ、こんな遠くで見てるだけ、か。

体が勝手に後ろへ倒れこむと、刈ってない芝生がふわっと受け止めてくれる。だけで、

「あたしって、成長ないなあ」

「柔らかい芝生、ぜんぜん気持ちよくなかった。

\*\*\*\*\*

「ほのかぁ、こんなもん？」

ユリコが見せてくれたのは、白い粉。これを水に溶かすと、きれいなピンクになるのよね。

「そうね もうちょっと、細かくしたほうがいいんじゃないかしら？」

こりこりこり、って乳鉢で粉にする音だけが、エアコンの効いた理科室に響いてる。

あたりには小さなプラスチックと、アルコーラランプ、

そして もみの木。

きっかけは、ユリコだったわ。赤い実になった、私たちくらいの大きさのもみの木を、親戚からもらったのだった。家に置いておく場所もないからって、園芸部にゆずるうとしてたのだけど。

「もみの木っていうと、やっぱり飾り付けたくなるよね？」

「って一言。いいわね、って言ったわたしもわたしなのだけど。」

「プラスチックに入れたきれいな色のくすりを吊るして、夏のクリスマスツリーを作ろう！」

なんて言ったのが、あのドタバタ合宿が終わったあと。わたしとなぎさがドックゾーンでひどい目に遭ってた日に決まっちゃったみたい。

名づけて、おくすりのなる木。化学部の夏祭り。

なんだけど。

「なにも、お盆直前にやることはなかったと思うのよね」

「そう言わないでよ。先生がいられるのって、いまだけみたいなんだから」

顧問の先生、お盆から里帰りしちゃうから、化学部が活動できるのはいまだけ。うん、それはわかってるわ。

「それはそうなんだけど」

ただでさえ、みんな田舎に行くとかいろいろあって出られないのよね。ちよっとだけ残ってた子も、ユリコのスモッグで全滅しちゃったし。

広い理科室にふたりつきり。ひとりのときも多いけど、なんだかよけいに寂しくなっちゃうわ。

「ユリコは、どこか出かけないの？」

「私は田舎もないし、イモ洗いの海やプールはうんざりだしね。快適な理科室を堪能しますよ」

はあ。なんだか、なぎさがわたしを外に連れ出しなくなる気持ち、わかる気がするわ。

さてと。おしゃべりしてる間に、ユリコのピンク

と、わたしのパープルができたわ。あとはグリーンと あら？

「ユリコ、このシアンのおくすりって なにで作るの？」

ツリーの完成図を見ながらチェックしてたけど、ひとつだけ、くすりの名前が書いてないわ。

「シアン？ ええと あれね？ おかしいな。たしかに」

シアンはあまりない色だものね。強い薬剤ならあるのだけど、それをつるすのはちよっと問題だわ。あの色で、ちよっとかかっても笑って済ませられるおくすり あ、そういえば。

「ユリコ、シアンのおくすり、わたしにまかせてくれる？」

そうユリコの目を見て言ったら、いきなり二歩も後ろに下がっちゃった。

「ま、まあ、ほのかだったらなんでもまかせちゃうけど なに？」

なんだかジトつ、て目でわたし見てるわ。もう、信用ないのね。

「うふふ。いいおくすりあるのよ♡」

\*\*\*\*\*

理科準備室のいちばん奥に、わたしの腰くらいしかない小さなロッカーがある。化学部用の実験器具置き場なのよね。

みんなの分の棚があるのだけど、いま使ってるのはわたしとユリコくらい。わたしはふたり分くらい場所を分けてもらって、いろんなおくすり置かせてもらってる。

むかし家のお蔵で遊んでいたとき、おばあちゃまから頂いたおくすり。古いラベルばかりだから、みんなは『ほのか蔵』なんて呼んでるみたいだけど。

たしかここに あ、あったあった。コルク栓の古いガラスビンに入った薄青の粉。ラベルは読めない

いけれど、わたしがちよこつと描いた落書きで覚えるわ。これを水に溶かすと、輝くようなシアン色になるの。ずっと昔、おばあちゃまに見せてもらったのよね。古くから伝わってるおくすり。

そつえばあの時、おばあちゃまが何か言ってたよね。ええと あ、そつそつ。『私やほのかが飲んで、なにも起こりませんよ。でも』

ん？『でも』？『でも』の後つてなんだつたかしら?? いいか。おばあちゃまやわたしが飲んでも平気なら、そんなに強い薬じゃないでしょ。

「ユリコ、お待たせ」

理科準備室から戻ってきたときには、机の上のフラスコに、きれいなイエローとレッドの溶液がゆれていた。

「それがシアンの薬？」

ユリコの手には、新しい乳鉢。集中し始めると早いのよねえ。

「そうよ。水に溶かすと、とってもきれいなシア  
ンに。」

そう言いながら差し出した手から、ガラスピンが  
消えた。

「ちよつと見せてね」

「こついつとぎの手も、ほんとに早いわ。思わずにっ  
こりしちゃうくらい。」

「それだけだから、あまり使っちゃダメよ?」

「わかってるわ。ちよつと匂いをね よいっ、と」

キュポン、つていい音がして、コルクのふたが開  
いた。そのとたん、粉がふわつと舞って

「いっけな ックシヨン!」

ああ、むせちゃって。

わたしはユリコの手からピン取って、ふた閉めた。

手近にあった下敷きで舞った粉を吹き飛ばして

うん、これでOK。

「ユリコ、大丈夫?」

ユリコがふらふらとこっちに歩いてくる。足元が

ゆらゆらしてるわ。これ、アルコールでも入ってた  
のかしら?

「ほのかあ〜 うふ♡」

え?

「ほあ〜のかあ〜 うふ♡」

ユリコが私の胸元に、頭もたれてきた。なに? な  
なの??

「うふ うふ♡♡」

そのまま、頬をこすり付けてる!?

「ちよ、ちよつとユリコ! なにやってるの!?!」

「うふふふふふ♡」

まさか、このくすりのせい? ああ、もう!

「目をさましなさいっ!!」

「うふふふ んきやあっ!!」

あ、倒れた。

わたしは、ユリコがけがしてないこと確かめてか  
ら、手に持ったフラスコにきつく栓をした。高

濃度アンモニア水にも、実用的な使い方ってあった

のね。

それにしても、このくすり

あ、思い出したわ。『でも』の後。おばあちゃま、こう言つてたのよ。『ほのかが年頃になつたら、使うかもしれませんね』つて。それで、このユリコの反応、つてことは――

「結論は、ひとつよね」

わたしは、倒れたユリコをいすで作つた簡易ベッドに寝かせてから、くすりを溶かしてガラスビンに入れた。風で飛ばされたら大変なことになつちゃうものね。

できたのは、確かに見たことのあるおくすり。輝くくらいにきれいなシアン色 だけど。

「どつしたらいいかしら、これ？」

考えながらふと窓の外を見たら、グラウンドの隅になぎさがいた。じいつと見ているはるか先には、男子部のサッカーグラウンド？

また、なぎさつたら。近くで見ればいいのに。

ああ、横になつちやつた。しょうがないわね

「そうだ。いいこと考えついちゃつた♡」

わたしは実験道具を片付けて、気絶してるユリコを台車に乗せた。今日は保健室の先生いたはずだからお願いしましょ。それから うふふ♡

\*\*\*\*\*

暑い。

目を薄うく開けたら、太陽が痛いくらいに差し込んできた。寝てる間に校舎の影が動いちゃつたんだ。遠くのグラウンドにはもう誰もいない。この暑さで、サッカー部も練習おしまいかな。そっか、半日無駄にしちやつたよね。

「熱っ！」

髪の毛さわつたとたん、やけどするんじゃないかと思つた。ばさばさやつて冷ましてみたけど、手ざわ



りがすつごく硬い。あゝあ、また痛んじやったなあ。

「も、帰ろつか」

思わず出てきた言葉に、ひとりでうなずいた。いるだけで、どンドン落ち込んでちやってるもんねん、帰ろ帰ろ。

「起きた？」

体起こしてたとき背中から聞こえてきたのは、ほのかの声だ。振り返らなくてわかる。あたしは、聞こえないようにそつと深呼吸した。

「あはは、バカだよねえ。練習ないつてのに、なんか来ちゃったよ。

「さあて、帰って宿題でもしよつか!」

わざと声おおきくして、明るくね。うん。やっぱりあたしは、こうじゃなきゃいけないよ。

もいちど深呼吸して、笑顔作って振り向いたら、ほのかがかバン持って立ってた。あれれ？

「ほのか、もう帰るの？ まだ3時だよ?」

お唇に別れるとき、今日は遅くなるかも、とか言っ

てたよね？

「作ってる途中で、ユリコが倒れちゃったの。体は大丈夫みたいだけど、今日はもうおしまい」

そう言いながら、あたしに手を出してきた。つかまつたあたしを立ち上がらせて、背中とスカートについた芝をぼんぼん、って払い落としてくれる。

「ついでだから、朝の続き。勉強いっしょにやらない? なぎさの家、行きましょ♡」

あたしの腕つかんで、引っ張ってるし。そんな気になれないんだけどな。ま、いつか。もう、無理に会うことないんだから。普通の付き合いつて、こんなもんだよね、きつと。

\*\*\*\*\*

なぎさの部屋に入るのは何回目かしら? いつ来てもたたくさんのぬいぐるみが、わたしを迎えてくれるわ。

「冷蔵庫に麦茶あったよ。他に誰もいないから、お菓子はそこにあるだけね」

机の上には、スナック菓子が少しとチョコがいっぱい。これがなぎさの『あるだけ』なのね。

「なに笑ってるのよ。でさ、何の宿題やる？」

そんなこと言っちゃって。うふふ。ぜんぜんやる気のないなんて、お見通しよ？

「その前に、ひとつ質問」

「な、なに？」

わたしが人さし指立てて言ったら、なぎさが一歩下がった。

「美墨なぎささんは、学校に来て何をしていたのでしょうか？」

あ、顔がひきつってる。

「何って、わけじゃなくて。だから、ね？」

ふふ。往生際が悪いわよ？

「理科室ってね、ちょうどグラウンドが見えるところにあるんだけど♡」

ああ、目をぱちくりしたまま黙っちゃった。

わたしは、ポケットの中からあのシアン色のおくすりを取り出して、ぱちくりしてるなぎさの目の前に出した。

「実はね、理科室で面白いおくすり見つけたのよ」

「き、きれいだけど。なに？」

わたしの頭に、ユリコの姿が浮かんだ。笑いながら、わたしに頬すりつけてた姿。

「ええとね。ホレ薬、かな？」

「ホレ薬い!?!」

「飲ませてみる？」

なぎさ、また黙っちゃった。そのまま、くすりピンをじっとみつめてる。もちろんわたしも、なぎさがこれ使うなんて思ってないわ。ただ、そんなに悩んでると実力行使しちゃうわよ、って言ってるだけ。

そんなのイヤでしょ？ さ、悩んでないで、またがんばりましょ♡

「ふん あむ」

え!?

「な、なぎさ?」

い、いきなりわたしの手からピンとりあげて、ふた開けたと思ったらそのまま飲んじゃった。のどが、ごくくって鳴ってるわ。

ええと 藤村くんに飲ませるんじゃない、自分で??

「ん、ん?」

「ちよ、ちよっと、なぎさ!」

なぎさの目が、とろん、ってなってる。その目が、まっすぐわたしの瞳を覗き込んで、

「ほのか 大好きよ♡」

ええっ!?! ちよ、ちよっと!

顔が真っ赤になっっているのが、自分でわかるわ。お芝居じゃない。普段のなぎさだったら、照れちゃって絶対言えないセリフなもの。

ああ、びっくりして固まったら、いつのまにか腰に右手が巻き付いちゃってる。痛くはないけど、すごい力。全然動けないわ。

なぎさ、どうするつもりだろ? くちびるにキスくらい、もうしょうがないって思うけど、でも、いまのなぎさだと、それだけで済むかしら?

わたしは? ほのか、覚悟はできてるの?

——うん。わたしのせいだものね。いいわ。なぎさの、すきにして

両手がわたしの腰にしっかりと回されてる。やわらかい、けど力強い、筋肉の感じ。

なぎさの部屋はクッションでいっぱいだから、倒れこんでもだいじょうぶみたいね ふぶ、いざとなると、こんなに冷静になれるものかしら。さっきから心臓は跳びはねてるっていうのね。

そのまま、なぎさの顔がわたしに近づいて甘息がかかってくる。飴でもなめてたのかしら?

それにしても。もう、目くらい閉じてくれないかな？　しかたないか。おくすり効いちゃってるんだものね。

わたしだけ、そのまま目をつむって、やわらかい衝撃を待った

ゴチツ！

つつ！　痛ぁいつ！！　衝撃が、おでこに来た！！

「やつぱほのか、おでこ硬いよ」

目を開けたら、なぎさがおでこさすってる　ええっ!?　そんな、まさか！

「なぎさ　なんで平気なの!?!」

「あたりまえよ。だってね」

なぎさは黙ったまま、わたしの腰から両手をはずして、ポケットのなかをこそこそ　取り出したくすりビンの中では、きれいなシアンが揺れてた。

「飲んでなかったの!?!」

「飲むふりして、のど鳴らしただけ」

それじゃ効いてたのって、最初の『大好き』だけだったの？　あぁ、もう！

「たしかにすごい薬だよ。ふた開けて匂いしてからちよつとの間、記憶ないもん　でもさ」

なぎさ、私の手にくすりビンを押し付けて、背中向けちゃった。

「ねえ、ほのか。メップルたち、一所懸命だったよね」

とつても静かで、低い声。そういえば、さっきから、声に感情がないわ

「なのに、あたしたちがこんなズルしちゃ、いけないと思うんだ。　もう会えないけど、会わせる顔ないじゃん」

つつ!!

「ご、ごめんなさいっ!!」

くすりビンを握りしめながら頭を下げた。あぁ、匂いが関係ないなら、こんなもの、このまま投げ捨てられるのにつつ!!

「いいよ。ほのかのことだからさ、これもあたしの

ため、なんでしょ？

でもさ　でも今日は、帰ってきてくれる？」

なぎさ、そのままだまって窓の外を見てる。わたしの方、気にしてる気配もないわ。

わたし、なんでこんなこと　！　こんなのだったら、どなってもらったほうがまだましだわ！！

\*\*\*\*\*

家に帰るまでのこと、まるつきり覚えてない。

気がついたら部屋の前にはいたけど、わたしはそのまま縁側に座り込んだ。

朝はすぐそこで、なぎさが寝転んでたっていうのに　いまは、とっっても遠く感じるわ。

虫の音が、静かに鳴いてる。まわりが少しずつ、オレンジ色になってく。

ひざを立てようと思ったら、おしりに硬いものが

当たった。ポケットの中、おくすりのビンがふたつ。

わたしは、空のくすりビンを見ながら、考えてた。古いラベル。読めない文字。好きになってくれるおくすり　おばあちゃまは、どつしてこんなもの、わたしにくれたのかしら？　これさえなかったら

「だめ、逃げたりしちゃー！」

わたしは思い切り首を振って、思いをはらった。開けた目の先に、シアン色のおくすりが揺れてる。

なぜだろっ？　なぎさならきつと、藤村くんに告白される自分を想像して、あたふたしちゃうはず、なんて、なぜ思っただんだろっ？

「わたしが、なぎさのこと、知らないから　」  
口に出してみても、はつきりわかった。

わかったつもりになってたのよ。いっしょにしゃべって、いっしょに闘って　みんなわかってる、なんて。嫌われて、当然じゃない。

「また、むかしに戻っちゃうのかな」

いっしょにいる理由がなくなっちゃうと

わたしはピンを脇に置いて、立てたひざに顔をうずめた。

もう、何も考えたくなかった。

\*\*\*\*\*

あつたかい。夏なのに、あつたかいのが、気持ちいい。

この感じ、たしか昨日？

顔を上げた目の前に、虹があった。庭の真ん中に向かって、まっすぐ降りてくる、虹。

「ほのか、ただいまミボ」

この声

「ミップル!？」

まさか わたしは目をつむって頭を振った。だって、都合がよすぎるもの。

でも、何度目を開けても、いた。ピンクのぬいぐ

るみ姿の、ミップル!

「ポルンもいっしょミボ 来るまでに疲れて眠っちゃったから、このままにしておくミボ」

グリーンのコンパクトになったポルンを抱きながら、ミップルがわたしのそばにやってくる。

「どうしたの?こんなに早く」

ああ、ほんとなら飛び出して抱き上げたいのに、足が動かないわ。

わたし、いまでも恥ずかしいこと考えてるんだもの。これで、なぎさとまた仲良くできる、なんて !!

「それは あれ? ほのか、ひょっとして取り込み中ミボ?」

「え? どうして?」

両手広げて、ミップルを迎えてたのに、わたしのちよつと手前で止まっちゃったわ。なにってるのかしら? わたしの脇 くすりピン?

「そのピン、レチシアのくすりミボ。男の子に告白

しに行くミポ?」

「レチシアって、これ?」

手に持っていたくすりピンを持ち上げると、ミッブルが大きくうなずいた。

「そうミポ。ちゃんとラベルにレチシアって あれ? そついえば、なんで光の園のくすりがこんなところにあるミポ?」

光の園のおくすりだったの。それじゃ、

「これ、媚薬じゃないの?」

「媚薬? それ、なにミポ?」

「ミッブルはあ、なぐんにも知らないポポあ 媚薬っていうのはあ、嫌いな人のこともあ、好きにさせちゃうおくすりのことポポあ」

グリーンのコンパクトから、寝ぼけた声が聞こえた。とたんにミッブルが、両手でぎゅっと押さえつけてる。

「そ、それなら違うミポ。これは、『好き』な気持ちを、何倍にもしてくれるおくすりミポ」

媚薬じゃなくて

もとからある『好き』を増やすおくすり

すおくすり

「普通は告白するために、自信のない自分に使うミポ ほのか、どうしたのミポ?」

あら? ほんとだわ、なんだろう。わたし、笑ってるわ。

さっきまで、あんなに落ち込んでたのに。なんだか、うれしい気持ちしかなくなっちゃったみたい。

「なんでもないわ。さ、行きましょ」

ポルンごとミッブルを抱き上げて、まだ不思議そうな顔してるわ。うん、こんどこそ、わかってるわよ。

「メッブルも来てるんでしょ? なぎさのところに」

\*\*\*\*\*

なぎさの家のすぐ下で、わたしは大きく深呼吸した。まちがってたら、大変なことになる。けど

「ほのか、何やってるミポ？ はやくなぎさの部屋に行くミポ」

わたしはミップルにちよつと笑いかけてから、残つておくすり、一気にあおつた。

「ほ、ほのか？」

ほわん、っていう感じ。世界が、あつたかく見える。いろんな気持ちがあふれていく。

ああ、やっぱりそうよ。どんなにイヤな気持ちでも、こころの中の『好き』があふれてくるわ。あのひとは、本当の気持ちなのよ

わたしは思いっきり深呼吸した。

「なぎさ〜っ！」

マンシヨンの窓から、なぎさの顔が見える。開けた窓から、メッブルの姿も。ふたりとも、ちよつと泣きそうな顔してるわ。

「なぎさ〜っ！」

ミップルとポルンを空にかかげたら、窓のふたりが笑っていた。

また、ほわん、って感じ。でも大丈夫。わたしの気持ちはわかつてる。『好き』が増えても、変わらない。

わたしは声を出さずに、口の形だけで叫んだ。

「なぎさあ〜っ！ だいすきい〜っ♡」

—おしまい—